



## 『関西企業ヒストリア』

～その強さの秘密・転換点を探る～

創業から70年以上の歴史を重ねる会員企業を取り上げ、時代の荒波を乗り越えて、長い期間にわたって生き残り成長してきた強さの秘密、その歴史の転換点を探ります。

### 第11回 創業 1909年(明治42年)

## 株式会社 TONEZ

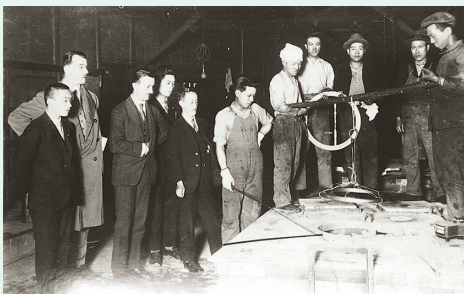
### 熱処理事業の草分けとして 木村鋼化工場を創業

**1909年**▶ TONEZの始まりは、明治末期にまで遡ります。農業中心の社会から工業化社会に大きく変わりつつあった1909年、創業者である木村延一と筒井保太郎の二人は、大阪府東成郡中本町(現・大阪市東成区)にて木村鋼化工場を創業しました。当時ともに30歳代半ばの技術者であった二人は、熱処理技術が今後多くの分野でますます重要になっていくと確信していました。工業社会の到来とともに、自転車部品など鉄を使った工業製品にも熱処理技術が取り入れられていくのは自然な流れでした。

民需用の機械工具の焼入工場としてスタートした木村鋼化工場ですが、この木村鋼化工場こそがわが国における熱処理事業の発祥の場であり、その草分けでした。

1912年頃からは人力車、自転車部品の焼入れ、高速度鋼(高速で金属の切削を可能にする工具の材料)、ホブ(カッターの一種)の焼入れを手掛けるなど事業規模を拡大したほか、第一次世界大戦後の好景気にも支えられ、熱処理需要は拡大の一途を辿りました。1921年には、東成郡生野国分町(現・天王寺区国分町)に移転。

さらに1925年、優れた技術力を見込まれ米国有数の



チェコスロバキア(当時)の  
ポルディ社技師の立会いで行われた  
大型スラストベアリングの焼入れ

自動車メーカー、ゼネラル・モーターズ(GM)の乗用車シボレーの組立工場の熱処理認定工場になるなど着実に事業を展開していきました。

その後、川寄貢、五男、玉男兄弟の入社、独立、合併などの紆余曲折を経て、1935年に新会社「東洋金属熱錬工業所」を設立。この流れで1939年に誕生したのが現在の株式会社東研サーモテック(当時は(株)東洋金属熱処理研究所)です。両社はルーツの同じ兄弟会社として、今日までともに発展してきました。



東洋金属熱錬工業所 社員一同

### 軍需工場に指定、戦火で操業不能に

**1938年**▶ 1938年には東洋金属熱錬工業所を株式会社へ改組し、名称を「株式会社東洋金属熱錬工業所」としました。会社設立後も技術力強化に積極的に取り組み、設備面の増強の他、ベアリングや自動車用タイヤチェーン、兵器類の焼入れ・浸炭焼入れなど事業面でも拡大を続けました。

記録によると、この頃から1945年の終戦まで、熱処理製品の受注品は陸海軍用航空機部品、海軍造船用部品、各種砲弾、一般金属製品などで、受注先は各海軍工廠、各陸軍造兵廠や民間軍需産業が多くありました。

太平洋戦争が開戦すると、1943年に軍需省航空兵器総局管理工場に指定され、総局の命により泉尾工場(大阪市大正

区)を新設、翌年8月に操業を開始しました。

太平洋戦争は、当初日本優位に展開していましたが、物資と近代装備を誇る連合国軍の猛反撃により、次第に形勢が逆転していきました。1945年になると戦局は一段と悪化、わが国本土の主要都市に対する空爆が開始されました。

同年3月14日、B29・270機による大空襲を受け、泉尾工場が焼失。操業開始からわずか1年足らずで戦火に崩れました。6月26日には西淀川区の120の中小事業場が破壊され、その中には東洋金属熱錬工業所の御幣島第1工場、第2工場が含まれていました。泉尾工場の焼失と、御幣島の2工場の被災。3工場とも軍需省の指定工場だったため、米軍の選別重点爆撃の標的になったのでした。

## 戦後復興、高度成長の波に乗り 生産力の増強と需要拡大を果たす

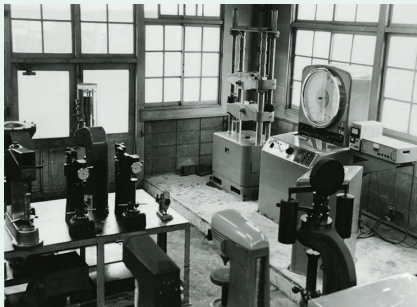
**1945年▶** 1945年に終戦を迎えると、軍事色一色の時代から民主主義の時代となり、社会的価値観は一変しました。生産の要である工場を失い、食糧や物資など何もかもが足りない厳しい状況ではありましたが、「人々の生活を安定させるには産業の復興は欠かせない」との思いから、東洋金属熱錬工業所は復興に向けて立ち上がりました。再建といっても熱処理の仕事はなく、焼け跡の整理や廃品の処理などが精一杯で、焼け跡に残ったレンガや焼入油を集めては売り、その日の飢えをしのぎました。そのような過酷な状況でも、熱処理への情熱だけは消えることはありませんでした。

終戦翌年の1946年、戦火による被害が大きかった御幣島第1工場、第2工場の再建を断念、閉鎖を余儀なくされました。しかし一方で、泉尾工場がついに操業を開始し、戦後復興に向けての大きな第一歩を踏み出すことができました。

安定した受注はすぐには入りませんでした。紡織機、自動車部品向けの焼入れが本格化したことが、この時代の東洋金属熱錬工業所を支えました。

戦時中は軍需に特化していたこともあり、戦後の民需、平和産業部品の受注には時間がかかりましたが、戦時中の

高い技術水準が評価され、次第に車両や紡織機、工作機械、発動機部品、自動車部品などの受注が入るようになりました。なかでも、紡織機リングの耐久性は世界



泉尾工場内試験室

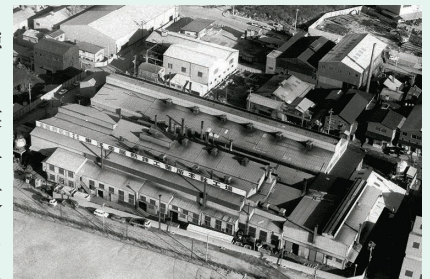
水準の数倍にも達するなど高い技術力が認められ、安定受注につなげることができました。その数年後、日本が紡績・繊維産業において大きな成長を遂げますが、その成長の陰に熱処理の力があつたことは言うまでもありません。

## 日本のインフラ、国民生活向上を支える

**1959年▶** 1950年代後半から60年代前半は高度成長真っただ中で、1964年には東海道新幹線が開通、社会基盤整備も一段と進みました。

この高度成長の波に乗るように、東洋金属熱錬工業所も事業規模を拡大させていきました。1959年、土地区画整理事業で立ち退きを求められた泉尾工場の代替地として、西淀川区に福町工場(現・大阪工場)を建設。高度成長期の旺盛な需要に後押しされて取引を伸ばしました。

急増する受注に対応するため、1962年、兵庫県高砂市曾根町に高砂工場を、1969年には高砂市阿弥陀町に高砂第2工場をそれぞれ新設しました。また1972年には、取引のあつた八幡製鐵(現・日本製鉄(株))から強い要請を受けて、東洋金属熱錬工業所の100%出資子会社として九州東熱株式会社を設立。九州地方への進出を果たしました。



福町工場(現・大阪工場)



ここが  
転換点

## ロケットビジネスに参入 宇宙開発事業の一翼を担う

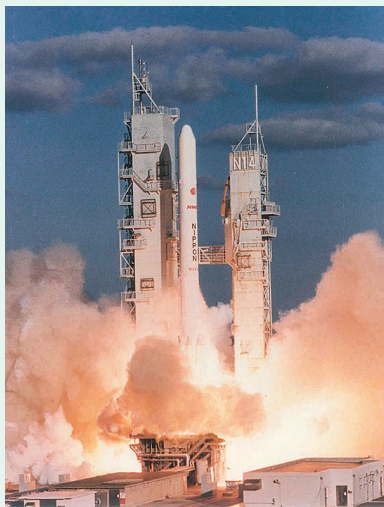
**1974年▶** 1974年、日産自動車から、「宇宙開発事業団(NASDA、現在の宇宙航空研究開発機構JAXA)が、実用衛星打ち上げ用3段式大型ロケット『Nロケット』を国産で製作することを決め、そのSOB(補助ブースター)のモーターケース製作を日産自動車宇宙航空事業部が担当することになった。その際の熱処理工程を東洋金属熱錬工業所に依頼したい。」という話が舞い込みました。防衛庁(現・防衛省)向け熱処理品などで、実績を積んで来た高い技術力が評価されたもので、この国家プロジェクトに当時の川崎社長も乗り気になり、全社をあげて協力することを決めました。

モーターケースなどの円筒形状の超薄肉長尺品用熱処理を行うには、特別な専用設備が必要ですが、当時国内では製作できる設備はありませんでした。そこで米国から調達



することを決め、翌1975年にガントリー型熱処理設備を導入、設置しました。

1976年以降、「Nロケット」モーターケースの熱処理を次々と実施、NASDA初期の人工衛星「さく2号」（技術試験衛星）および実用人工衛星「うめ2号」（電離層観測衛星）1段目補助ロケット用のモーターケース、さらにN-II型ロケット用、H-I型ロケット用のモーターケースおよび3段目チタン合金製球形ロケットなどの熱処理を行い、わが国の宇宙開発事業の一翼を担いました。



N-II型ロケット打ち上げ

## 世界最大級のピット型ガス浸炭炉を新設 国内メーカーの国際競争力向上に貢献

**2011年** ▶ 2011年、得意先からの3mを超える大型歯車の浸炭処理のニーズに対応するため、高砂第2工場に世界最大級の有効直径4m、深さ2mのピット型ガス浸炭炉を新設しました。新大型炉の完成で国内の公道を輸送できる最大サイズの直径4mまでの歯車の熱処理が可能となり、船舶用減速機、製鉄用圧延機、産業機械などの歯車の大型化、風力発電装置の大径ベアリングに対応し、国内メーカーの国際競争力向上に貢献することができました。



船舶減速機用大径歯車

## 中国に初の海外拠点

**2012年** ▶ 2000年代に入り自動車産業でも日系メーカーの中国進出が進み、得意先から中国での丸棒鋼の熱処理事業の打診があり、2012年、初の海外拠点となる中国現地法人「東熱(常州)熱処理有限公司」を設立しました。

丸棒鋼の熱処理は、1973年に大阪工場にウォーキングビーム式の専用焼入炉を設置しその後、細丸棒鋼用ローラーハース式焼入炉を設置し量産に対応しました。自社設計による

設備改善、加熱・冷却方法の開発により熱処理の最大課題である歪低減を実現し、高砂第2工場、九州工場、加西工場(2009年新設)で実績を積み重ねて来たことからの打診でした。

設立当初は尖閣諸島問題による日系自動車の販売低迷で苦戦しましたが、その後は徐々に売り上げを伸ばし、受注増加に対応するため2019年から2020年にかけて焼入炉・焼戻炉を増設しました。



上：東熱(常州)熱処理有限公司  
下：丸棒鋼の熱処理

## 新時代に向け歩み出す 社名をTONEZに改称

**2018年** ▶ 1938年に「株式会社東洋金属熱錬工業所」が設立されてから80年という節目を機に、2018年10月1日、社名を「株式会社 TONEZ」に改めました。新社名の「TONEZ(トーンズ)」は営業活動や掲示物などで長年使用され、社内外に広く親しまれていた略称の「東熱」から名付けられました。

2019年、元号が令和へと改められたこの年、TONEZは創業110年を迎えました。TONEZが1909年の創業以来一貫して手掛けてきた熱処理技術は、産業活動から日常生活まで、社会に欠かせない存在です。これからも熱処理新技術の開発に意欲的に挑戦し、熱処理業界のリーダー的存在として、TONEZは150年、200年続く企業を目指します。



株式会社 TONEZ

本社所在地：大阪府大阪市西淀川区福町1-6-20

従業員数：318名 資本金：8,203万円

事業内容：金属材料および部品の熱処理加工全般